

## 再びの脚光に思い寄せる

南足柄市の山林で1980年に見つかった、ヒノキの変異種「枝垂れヒノキ」。この品種の研究を進めてきた県はこのほど、品種登録期間の満了を受け、発見者の故・古屋治吉さんの息子で同市塚原在住の治平さん(67)、富雄さん(61)兄弟を訪問。18年間に及ぶ研究成果を報告し、今後の展望で意見を交わした。

# 父が見つけた「枝垂れヒノキ」 古屋さん兄弟に県が研究報告 南足柄

枝垂れヒノキは通常のヒノキとは異なり、枝が90度以上に大きく垂れて成長。特徴的な形状から雪が付着しにくく、冠雪被害に強い。また枝打ちの必要がないため、狭い面積に密集して植栽できる点もメリットとなっている。大工や木工職人だっ

た治吉さんは、建築用の材などに活用でき、日本産の林業に多大に貢献できる品種と判断。見つけた新種を自宅敷地内に移植するなど、品種登録を目指して動き始めた。しかし、登録や増殖を依頼した県林業試験場との情報の行き違いにより、1994年に

「県が見つけ養成した」と発表されてしまったという。父親の遺志を継いだ古屋さん兄弟は、県に申し入れ書を提出するなどして調整。当時の長洲一二知事との間で、故人の功績顕彰などを盛り込み、合意書を結んだ。

96年には「足柄したれ」として、正式に品種登録。合意書の内容を基に同試験場では、場内試験地や県立21世紀の森に展示林を設けるなど、ヒノキの発展に向けて研究開発を進めてきた。一方、樹高成長などの研究では、期待通り

の結果を得ることが難しかった。さらに時代の流れで、建築用材としてのヒノキの価値や需要が低下。この影響で研究の予算付けも難しくなり、積極的な品種改良は見合わせる方針となった。

ただ、これまで栽培してきた木々の経過観察は継続。種の保存にも取り組んでいく。治吉さんが見つけた移植した母木は強風に吹かれて倒木したが、挿し木で成長した枝垂れヒノキは富雄さんの自宅の庭で大事に育てられている。94年に1・8メートルだった樹高は12メートル、幹周り



富雄さん方で大切に育てられている枝垂れヒノキ

は18センチに成長している。富雄さんは、「研究が止まってしまうのは残念だが、種を残してもらえるのはありがた

い。ここ20年で木材に対する人々の考えが変わったように、今後二一スが高まるかもしれない。遺伝子を絶やさないければ、再び価値が高まると思う」と、見通しを語った。

続けて、「登録期間を終え、研究などがオープン化されることにより、新たな切り口での利活用も生まれるかもしれない」と目を輝かせる富雄さん。父が見つけ、建築木材としての価値を見いだした枝垂れヒノキを見上げ、感慨深そうだった。